Title	The Nature and Destiny of Man, Volume II "Human Destiny" : 翻訳への挑戦
Author(s)	鈴木, 幸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.4, 2012.2 : 11-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3702
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

報　告

The Nature and Destiny of Man, Volume Ⅱ “Human Destiny”　―翻訳への挑戦―

鈴木　幸

1．はじめに

2011年７月21日（木）より、聖学院大学総合研究所ニーバー研究の一プロジェクトとして、ラインホールド・ニーバー著、*The Nature and Destiny of Man*の第２巻、“Human Destiny”を翻訳する会が発足した。1951年に翻訳・刊行された第１巻『人間の本性』武田清子訳（新教出版社）以来の、一冊を完訳する試みである。４名の研究所員が集い、章毎に担当・翻訳し、ニーバー翻訳会と称した勉強会において、その翻訳について議論する。監修は、当研究所所長であり、ニューヨーク・ユニオン神学大学院においてニーバーに師事した大木英夫教授である。

この翻訳プロジェクトについて、筆者は専門の翻訳論の観点から、以下に報告する。

2．翻訳の意味

ニーバーは、20世紀アメリカを代表する神学者であり、また社会倫理学者、政治哲学者でもある。近年では、オバマ米大統領もニーバーの影響を受けていることが知られ、「オバマの神学者」としてあらためて注目されている。

*The Nature and Destiny of Man*は、1939年に、アメリカ人で５人目となるギフォード講演者として、エディンバラ大学で講演、1941年（第１巻）と1943年（第２巻）に出版されたものである。

「歴史の神学」とも呼べる、ニーバーの円熟した思想が展開されているこの書は、ニーバーの主著として見なされている。約70年経った今日、翻訳を試みることは大きな挑戦である。しかし、現代日本において、二―バーの思想を受け入れ、発展・適応させていくためにも、翻訳は欠かせない。また、ニーバーが亡くなって40年目にあたる本年に、このプロジェクトが持ち上げられたことは、まさに“destiny”といえる。

3．ニーバー思想の中での翻訳

翻訳の難しさは、訳語の選択にある。翻訳者は翻訳言語でのパラダイム（ソシュールのいう「可能性」）の中から、どの語を選ぶかを決める。しかし、原文を書いた著者もまた、一定の文脈の中でシンタックス（同、「線上の関係」）の軸をつくったことに留意しなければならない。つまり、原文における一語一語の選択にも、原著者の想いが込められている。翻訳者は、原文を理解すると同時に、原文とは異なる言語を用いて翻訳という新しいテクストを創りだすため、その大きな役割・責任を負っていることに、常に留意する必要がある。

翻訳が行われる際に、全ての語が原文言語文化・翻訳言語文化間に等価を持つとは限らない。翻訳は不可能であるとさえ言われる。しかし、ニーバーを訳すにおいて、その思想が秘められた言葉を、翻訳においても伝える必要がある。そこで、いつ、誰のために、何のために書かれ、そして訳すのか、その目標を見極め、定めることで、翻訳言語内の条件によって候補に挙がった語から選ぶことが改めて可能になる。

本翻訳会では、神学的背景を十分考慮した上で、幅広い分野の人に読んでいただけるよう、日本語としての自然さと、専門用語に偏り過ぎない翻訳を目指す。

4．おわりに

これまでに10（2012年２月現在）回の翻訳会が行われてきたが、ニーバーの思想を日本語で表現することは至難の業であることは明らかである。しかし、だからこそ翻訳が完成した時の喜びは格別であることだろう。完訳の達成を、あたたかく見守っていただきたい。

（文責：すずき・みゆき　聖学院大学総合研究所特任研究員）